

大ききの堂宇（ほぼ正方形）一つの石製の基礎の大ききは、およそ一辺四・五メートルであり上り口の小さい段が南側（幅七〇センチ）と北側（幅一二〇センチ）に位置している。このデークは先のレポートには無く、南側の段も図から省かれている。菩提樹とおぼしき大木が、境内南側中央に位置し、その北端には浅い井戸の様な水（塩水か）を扱う施設がある。この境内は、草木が伐採されて見られる範囲で長方形・約四百坪くらいはある。一行は、僧侶である為ここで（一一五三年以来初めて）法楽を（灯明と線香を以て）捧げた。回教徒の地なので旅行会社はこうした宗教行為は勧めなかった。しかしながら、トラブルが無かった事を付記しておく。

アウグスティヌス時代の

マニ教徒の自己理解について

山田 庄太郎

本発表の目的は、アウグスティヌス研究の立場から、彼の著作『ファウストウス駁論』を基に、四世紀末から五世紀初頭に活躍した属州アフリカのマニ教師ファウストウスを例として、当時のマニ教徒の自己理解の一端を明らかにすることにある。以下、当時のマニ教徒の自己理解の一端を明らかにすることにある。

既に須永梅尾はその試論的論文に於いて、五世紀以後、属州アフリカでマニ教がキリスト教的異端へと転じ教勢を減じてい

く歴史的事実を指摘し、その歴史的転換点をファウストウスの時代に位置づけている。我々はこの須永の指摘を念頭に、ファウストウスの思想を新たにそのセクト論から捉え、マニ教のキリスト教化の過程に関して一つの示唆を提示することを試みた。議論は以下の三つの部分に分かたれる。

第一に我々は予備的考察として、ファウストウスの三つの律法の概念について考察を加えた。ファウストウスは、真の教えが歴史の初めから継続してきたこと、従って旧約の伝統の内にも義人が見出されうること、またそれ故に旧約は全面的に拒絶される必要はなく彼の言う「真理」に合致するものは受容しうること、の三点を認める。従って彼にとり旧約聖書の否定は、部分的なものに留まる。

第二に我々は彼のセクト論を論じた。彼はセクトを「他の者達と全く異なる見解を抱き、自らと異なりまた全く類似していない儀礼によって神性を敬うことを確立する」ものと規定する。この定義に従い、彼は異教徒とマニ教徒が異なるセクトに属する事を明らかにする。というのも前者が善と悪とに「単一の原理 *monarchia*」を指定するのに対し、後者は神を善の、質料を悪の原理として看做すからである。この「単一の原理」の概念を、カトリックとユダヤ教は異邦人達からそれぞれ分かる時に引き継いだとファウストウスは主張する。従って彼によれば、真理のセクトと誤謬のセクトというただ二つのセクトのみが存在するのであり、彼は前者にマニ教を、後者に異邦人の宗教と、そこから生じる諸シスマを位置づけるのである。

第三に我々は、上述二つの議論を基にファウストウスのマニ

教観を論じた。彼が有史以来の真の教えの存続を認める限りに於いて、真理のセクトは歴史の初めから、マニ自身の誕生とは別に存在していなければならない。この真の教えは誤謬のセクトによる虚偽の付加により隠されているとされる。パラクレイトスたるマニの教えは、このように混交した虚偽と真理とを判別する事にある。従つてファウストゥスは聖書を読み解く際の真理の基準を提供する権威としてマニを立てると言えよう。しかしその一方で彼は、キリストの教えとマニの教えの調和を示そうと、こうしたマニの権威を聖書に基づいて立証しようとしてみている。事実、ファウストゥスによるマニへの言及はほぼ皆無といつて良く、四世紀には既に属州アフリカで受容されていたマニの書簡「基本書」に見られるマニの神話を引用することもない。

この「基本書」においてマニの神話はキリスト教に対するマニ教の優位性を示す役割を負っている。しかしまた聖書と最も鋭く対立するのが、このマニの神話であった。ファウストゥスは三つの律法概念と真理のセクトの概念を導入することにより、キリスト教思想とマニ教思想を一致させようと試みるのである、この試みは一定程度成功していると言えよう。しかし他方でその神話体系を後退させることにより、マニ教をカトリックから区別する為の示差性を提示するという点では課題を残したと言える。

以上の議論から我々は、真理のセクトの概念の導入とそれに伴うマニの役割の縮小が、当地のマニ教の異端化の一因になったと結論づけるものである。

メソポタミアの「呪術師」

渡辺和子

宗教学のなかでメソポタミア宗教はまだ本格的に論じられていない。遠い過去の宗教について論じることが概して難しいが、メソポタミア宗教の場合にはいくつかの特別な事情がある。一つは、粘土板文書（およそ紀元前三〇〇〇年頃から紀元前五〇〇年頃のもの）に書かれた楔形文字（主にアッカド語）の解説がなされ、メソポタミアの「宗教文書」が世に知られるようになったのが一九世紀後半以降であったため、同じ頃から開始された「近代宗教学」の視野のなかにメソポタミア宗教はほとんど入らなかつたこと。もう一つは、西欧のアッシリア学者（楔形文字文献学者）によつて聖書、キリスト教、そして西欧近代文明のフィルターを通してメソポタミアの「宗教文書」が論じ始められ、その影響が現在でも完全には払拭されていないことである。さらには、文書が主に粘土板に書かれたという特殊事情がある。粘土板文書は自然乾燥だけで必要十分な耐久性をもち、すべて作成時には焼かれていないことが最近になってわかつてきた。耐久性をもつ石や金属に刻まれた文書もあるが、高価であるため割合は少ない。発見される文書の多くは、主に政治的抗争のなかで火がかけられたときに適度に焼けて残存し、後代の発掘などによつて出土するものである。火災は粘土板文書にとつてある種のタイムカプセルの役割を果たすが、それはせいぜい火災以前の数十年の時間を閉じ込めるものでし